スポーツが居場所作りにもたらす影響について

－在留外国人スポーツ組織を対象として－

内田　萌奈（筑波大学）

１．目的

これまで余暇や娯楽として扱われてきたスポーツは、近年、様々な分野で活用され始めている。特に2000年代以降の国際開発の現場では､有用な開発手法の一つとして積極的に活用されるようになった。しかし、先行研究の多くは、スポーツの意義やスポーツによる成果の検討に留まり、豊かな地域創造を目指すための「スポーツを通じた居場所づくり」に関する議論は限定的である。

以上の問題意識から本研究では､｢スポーツ参加者がスポーツ組織への愛着を形成する過程」を明らかにすることを目的とする。

２．研究方法

本調査では、筑波大学T-ACTに加盟しているスポーツサークルKick chatのメンバー8名を対象に、2023年10月から12月の期間で半構造化インタビューと参与観察を行なった｡調査で得られたデータは、内容分析の手法を用いて解析し、内容を客観的に判断するために「場所愛着理論」に基づいて、人の次元，場所の次元，過程の次元の3点から考察した。

３．結果

内容分析の課程でデータをコード化した結果、以下の文章中に括弧で示した5つのコードに分類され、「他者との関わり」｢スポーツ組織との出会いと組織の役割」の2つのテーマが浮かび上がった。

１）他者との関わり

サークルでは、サッカーを媒体として国籍や所属の異なる仲間が集うことにより、競技的なつながりに留まらず､｢互いの文化に触れ合う機会」や「学術的なつながりを持つ機会」を得るなどして、他者との社会的な相互関係を構築していた。

２）スポーツ組織との出会いと組織の持つ役割

サークルは､｢過去のスポーツ経験が新たなスポーツ活動場所に接触する機会」をもたらし、対話を図るツールとして活用されていた。なお、言語面と生活習慣の違いが課題になり易い在留外国人のスポーツ参加に対して、同サークルでは、言語面で「コミュニケーション言語を英語に設定」し、生活習慣の課題においても、多様な背景を持つ「参加者が対話して課題を解決」する手立てを用意していた。

４．考察

スポーツが居場所作りにもたらす影響として、まず「人の次元」では、記憶を呼び起こす活動が愛着感情を増幅させ、個人の場所愛着とメンバー間の場所愛着が相乗的に意味づけられることで集団レベルの愛着を生み出していた。

次に「過程の次元」では、参加者がサークルでのスポーツを通じて自身との類似性を読み取り、特別な場所と認知することで親近感を高めていた｡また、参加者がスポーツを通じてサークルを楽しい場所と捉えたことで場所への充足感を増していた。

最後に「場所の次元」では、共通の関心で繋がったコミュニティを形成し、その場が与える社会的相互作用を場所への愛着に昇華させていた。さらに、他集団と関わることで、自身の集団への帰属意識を高め、サークルが行うスポーツ活動の場に対する物理的な場所愛着を深めたと考察された。

５．結論

調査の結果、スポーツと場所には親和性があることが判明した。また、スポーツ組織は、場所愛着を高めるために多様な人や団体と出会う機会を創出し、参加者がスポーツ組織への愛着を高めることで社会的な相互関係を促進させていることが分かった。

６．主な参考文献

1) Scannell, L., & Gifford, R. (2010). Defining place attachment: A tripartite organizing framework. Journal of Environmental Psychology, 30(1), 1-10.